

審査の結果の要旨

氏名 伊藤 秀樹

本研究は、多様な理由（例 学業不振、不登校）によって全日制高校への進学に困難を抱える生徒を受け入れ、教育支援や卒業後の進路への移行支援を行なう「非主流の後期中等教育機関」（例 定時制高校、サポート校）の一つである高等専修学校での丹念なフィールドワークをもとに、生徒の学校適応や進路形成をめぐるメカニズムを浮き彫りにした。本研究は、生徒のインタビューから浮かび上がってきた多様な目標への願望、「志向性」を、学校適応・進路形成との関連で分析し、狭義の地位達成・学業達成へのアスピレーションに焦点化しすぎる研究に警鐘を鳴らしている。

論文の構成と内容は、以下のようになっている。まず、第一章では、「非主流の後期中等教育機関」を定義すると共に、論文の射程範囲を特定している。第二章においては、「非主流の後期中等教育機関」内の共通性と差異（例 中退率の違い）を明らかにしている。第三章では、東京都の定時制高校（都立 55 校、私立 4 校）と通信制高校（都立 3 校、私立 28 校）、高等専修学校（私立 15 校）、サポート校（私立 22 校）に関して、ウェブサイトと進学情報の分析、高等専修学校での調査を通して、これらの学校が共通して対象とする層の特徴を捉えると共に、表向きの選抜基準をよそに、ノンメリトクラティックな基準（例 生徒の素行）がいかにか作用しているかを考察している。第四章以降では入学した生徒の約九割が三年の修業年数で卒業し、不登校経験のある生徒の九割以上が最終学年には無遅刻、無欠席となる Y 高等専修学校（私立、一学年 75 名、非障害者四割、設立後三十年）における生徒インタビュー、及び、学校の参与観察データをもとに、生徒の登校継続を支えるメカニズムを分析している。生徒の「成長志向」、教師に承認されたい「被承認志向」、先輩にロールモデルを見出す「年長役割志向」やそれらを支える指導の特徴（「密着型教師」「生徒の部活動への巻き込み」「学校と家庭の協力体制」）とその形成過程を浮き彫りにした。また、進路形成においても、生徒の諸志向（楽しさを追求したり他者のサポートをすることへの志向、教師・カウンセラー等の年長役割のロールモデル化、成長志向）を活用した学校での「出来事」の創出と諸志向を方向付ける実践とを分析している。

本論文は学校格差研究において最底辺に位置付けられ、「問題視」されがちな生徒層(at-risk)を受け入れる「非主流の後期中等教育機関」が、主体者としての彼らのニーズを中心に据えることによってこそ顕在化する、多様な生徒の志向性とそれらを契機とする諸実践の可能性や課題を、8 年間に渡るフィールドワークをもとに浮き彫りにし、逆転の発想によって底辺からの問題提起をしていることに意義がある。さらに、そこでの学校適応や進路形成のプロセスをブラックボックス化することなく描き出している点にも意義がある。以上により本論文は、博士（教育学）の学位を授与するのにふさわしいものと判断された。